

一

屑屋くずやの周助しゅうすけが殺されました。

佐久間町の裏、ゴミ溜ためのような棟割長屋むねわりの奥で、魚のように切られて死んでいるのを、翌る朝になってから、隣りに住んでいる、蝮まむしの銅六どうろくという緞売りさしうのいかさま博奕ばくちを渡世のようにしている男が見つけ、町内の大騒動になったのです。

周助はもう六十に手の届いた男、鉄砲てっぽう箆ざるを担かついで江戸中を廻り、古着、ガラクタ、紙屑までも買って歩いて、それを問屋に持込み、僅かばかりの口銭を取って、その日その日を細々と送っている屑屋ですから、人に怨うらまれる筋などのあるべき筈もなく、そうかと言って泥棒につけ狙めわれるほど、纏まとった貯えたくわのありそうな人間でもなかったのです。

ガラッ八の八五郎は、平次の指図でとにもかくにも飛んで行きました。

「八兄哥、もう遅いよ。下手人ほは拳こぶしったぜ」

それを迎えて、路地一パイの大きな顔を見せるのは、お神楽かぐらの清吉です。

「へエー、そいつは手廻しがよかったね」

ムツと来たのを顔にも出さずに、この縄張り荒しに微笑をさえ見せるように、近頃の八五郎は鍛錬たんれんされて居ました。が、その微笑の苦渋ゆがな歪みゆがは、八五郎の意志ではどうすることも出来ません。

「三輪の親分が、蝮まむしの銅六を挙げて行っちゃったよ。今頃は番所で調べ

ているだろう。蝮と言われた男だから、どうせお白洲で石でも抱かせなきゃ、素直に白状する野郎じゃあるめえ」

お神楽の清吉はそう言つて、骨張った顎あごを撫でるのです。元は三河島の馬鹿ばか囃子ばやしに入つて居たという清吉、何時の間にやら三輪の万七の子分になつて、事毎にガラッ八の向うを張っている岡っ引でした。

ガラッ八は、清吉の嫌がらせを聞き流して、屑屋の周助の家に入りました。入口の土間と、六畳一間、それにお勝手と便所が附いた切り、見る影もなく住み荒した長屋ですが、入口の土間は手入れ次第では、小さな店にもなるように出来たもので、周助はそこへ買い溜めのガラクタで、問屋で値の出なかったものや、古道具屋に持ち込んで、いくらかの利潤もうけを見ようとしたものを、順序も系統もなく積み重ねて置きました。

大部分は皿、鉢、行燈、と言つた世帯道具の不具物かたわものですが、中には大擬い物おおまがの高麗焼こうらいやきの壺、紫檀したんの半分欠け落ちた置物、某法眼なにがしほうげんの偽物にせものの一軸じく、古九谷の贗物の花瓶——と言つた、物々しくもグロテスクな品物もあります。

一步六畳に踏込むと、——

「あッ」

物馴れたガラッ八も顔を反けたほどでした。屑屋の周助——ガラッ八も顔見知りの親爺が、血潮の海の中にこと切れているのですが、得物の出刃庖丁は血潮の海の中に捨ててあります。

「八兄哥あにい、この三軒長屋は、右隣りが魚屋の伝吉で、左隣りは蝮まむしの銅六だ。二人とも昨夜ゆうべは遅く帰ったから、何にも知らないって言い張るが、——血の凝かたまつた様子では、周助が殺されたのは夜中

前だ、何方か先に帰ったものが殺したに違えねえ——とこういう鑑定だ」

「何方が先に帰ったんだ」

「それが判らねえ。伝吉は銅六の方が先だって言うが、銅六は伝吉より後だと言ひ張っている」

「それじゃ、銅六が殺した証拠にはなるめえ」

「銅六は亥刻過ぎに一度帰って灯をつけたまま、急に寝酒が呑みたくなって表の酒屋まで酒を買ひに行ったが、いくら叩いても起きちゃくれない、腹は立ったが、どうすることも出来ないから、そのまま帰って寝た——とこう言うんだ」

「酒屋で訊いて見たのかい」

「そこに抜きがあるものか。すぐ行って訊いて見たが、いかにも夜中に酒を買ひに来た者はあるが、亥刻過ぎは商売をしないことにしてるから、開けなかった、とこうだ」

「それじゃ、銅六の言うのが筋が通っているじゃないか」

「伝吉は担ぎ売の魚屋だが、町内では評判の良い男だ。男がよくて、世辞がよくて、魚が新しく、おまけに安い、——その上出刃庖丁は伝吉の家から持出したものだ。伝吉は自分の家から持出した出刃庖丁を、死骸の側へ捨てておくような馬鹿馬鹿しい男じゃねえ」

「へーエ」

「それに下手人が魚屋なら、もう少し庖丁使いが器用だよ。人間だって鮪だって、大した違いじゃあるめえ」

「フーム」

「気の毒だが、こんどの手柄は此方だよ、——もう帰るのかい、八

兄哥。銭形の親分に宜しく言ってくれ、ハイ左様なら」

日頃銭形平次に鼻をあかされてばかりいる三輪の万七とお神楽の清吉は、平次のお膝元に事件があるのを狙って、疾風迅雷的に下手人を挙げて行ったのでしよう。死骸の側に捨ててあった出刃が伝吉のだから、下手人は伝吉でないと睨んだところなどは、ガラッ八が考えても、なかなかの出来栄えです。

二

「こんなわけだ、親分、腹が立って、腹が立って——」

ガラッ八の八五郎は、一と通りの事を報告すると、滅茶滅茶に憤激するのです。

「それっ切りかえ」

銭形平次は静かに反問しました。

「それっ切りにも何にも、腹が立って、腹が立って」

「馬鹿野郎」

「へエ——」

平次はガラッ八の顔へ正面から叱咤を叩き付けました。

「岡っ引がそんな事で済むと思うかよ、馬鹿ッ。腹を立てる暇があったら、なんだって突っ込んで調べて来なかったんだ」

「だって親分、調べようがありませんぜ」

「それだから馬鹿だって言うんだ、——何か盗られた物はないのか」

「本人が殺されたんだから、そいつは解りませんよ」

「両隣りの家へ行って見たのか」

「いえ」

「周助が平常ふだん付き合っているのはどんな人間だ」

「それがその、蝮まむしの銅六と、魚屋の伝吉と」

「それっ切りか」

「――」

「来いッ、八。そんな事だからお神樂の清吉なんか馬鹿にされるんだ」

「――」

八五郎は一言もありませんでした。お神樂の清吉に牛耳ぎゅううじられて、日頃の八五郎に似気なく、殆ほとんど周助殺しの調べの筋も通しては来なかったのです。

佐久間町まではほんの一と走り。

「おや、銭形の親分」

お神樂の清吉はまだそこに粘ねばって居ました。

「ちよいと邪魔をするよ」

「へエ――」

貫禄かんろくの違いで、清吉も平次の前では大きな口が利けません。

「今朝、銅六が死骸を見付けた時、戸締りはなかったんだね」

「へエ」

平次はガラクタの山をかきわけて、六畳に入りました。

まだ検屍けんし前の死骸は、夏の真昼の明るさに曝さらされて、長屋の奥と言っても、何の蔽おほうところもなく見えます。

「血がひどいから滅茶滅茶に見えるが、後ろから抱きこむように、急所を狙って喉笛のどぶえを掻切ったのは大した手際だね」

「すると、庖丁使いの馴れた野郎だね、――鮪まぐろだって人間だって

余り変りはねえ」

ガラッ八は飛んだところで溜飲りゅういんをさげました。

てっぽうざる

「鉄砲てっぽう策を担いで歩く屑屋くずやにしちゃ、品物があり過ぎるようだ、周助は思いの外暮しが良かったかも知れないよ。念入りに押入や戸棚を見るがいい」

平次はガラッ八に指図しながら、自分もお勝手のあたりを覗いておりました。

「暮しが良いか悪いかは知らないが、ろくな絆纏はんでん一枚無いぜ。戸棚の中だって、味噌と塩たぐわんと沢庵が少しあるつきりさ。ろくな膳もない始末だ」

清吉は少し反抗的です。

「それが金を溜めている証拠じゃないか。商売物の品をあれだけ買いためている癖に、ろくな着換も、膳や小鉢や、鯉節かつおぶしの片らないというのは、周助の並々でない心掛けだ」

「すると親分、何処かに金があったわけですね」

「きつとある。——その金が盗まれなきや、怨みうらの人殺しだ」

「さア大変ッ」

八五郎は少しおどけた調子で、家の中を捜し始めました。たった六畳一間にお勝手と店ですから、わけもなく眼が届きます。その上床を剥いだり、天井を覗いたり、清吉まで手伝って半刻ばかり掻き廻しましたが、小判は愚かおろ、鰐銭びたせん一枚出て来ません。

「店の品物も見るといい」

「ガラクタばかりですよ、親分」

「そのガラクタの中に隠してやしないか」

壺も手箱も、瓶かめも戸棚も、往来に持出されて、天日の下に念入

りに調べました。

「ありませんよ、親分」

「その棚の上にあるのは何だい」

「仏様のお厨子ずしじゃありませんか」

店の棚からおろして来たのは、持ち重りのする手頃なお厨子。

「埃ほこりが附いてないネ、八」

「へエ——」

蓋ふたを払って見ると、中に納おさめてあるのは、一尺二三寸の立像りつぞうが一つ。恐ろしく煤すすに塗まみれておりますが、慈眼を垂れて、確しかと嬰子えいじを抱いた様子は、見馴れた仏様の姿態ではありません。

「変っているね、親分」

「子育こそだて観音かんのんだよ」

「へエ——」

「南蛮なんばん仏ぶつとも言うよ。昔切支丹が蔓はびこっていた時、お上の眼のを免がれて、これを本尊にして居たんだ。観音様と見せかけて、実は切支丹のサンタ・マリア様だよ」

「すると、屑屋の周助は切支丹だったんだね」

「そんな事が判るものか。周助は屑屋だぜ、潰つぶしのつもりで買ったかも知れないじゃないか」

お神楽の清吉は口を容れました。

「いや、商売ずくで買った品なら、これ一つだけ埃ほこりを払って、丁寧に棚の上に置く筈はない、——胎内たいない仏ぼとけがあるかも知れない、台座だいざを外して見るがいい、八」

銭形平次に注意されて、子育観音の台座を外すと、中から落ちたのは、半紙に包んだ小判。

「あッ」

「そんな事だろうと思ったよ、何枚あるんだ」

「百両ありますよ、親分」

ガラッ八は小判を勘定しながら、恐ろしく酔っばい顔をします。「こいつは面白くなりそうだ。八、もう少し周助の身許を洗ってくれ。どこの生れで、どこから来た人間か、知合はないか、一年に一度でも往来する人間はないか、周助から金を借りてる奴はないか、子供や女房はなかったか——そんな事を洗いざらい捜すんだ」

「へエ——」

八五郎は糸目の切れた颯のように飛んで行きました。極り悪くモジモジして居たお神樂の清吉も、それに続いたことは言う迄もありません。

三

「誰だい」

「——」

「お前は、誰だい、何か用事があるのか」

平次は草履を突っかけて飛んで出ると、逃げ腰になった娘を呼止めました。せいぜい十七、八、洗いざらしの単衣を着て、色の褪めた赤い帯をしめて居りますが、何となく清浄な感じのする娘です。

「あの、叔父さんは？」

「叔父さん？」

「周助さんは何うかしたんでしょか」

「お前は周助に用事があつて来たんだね」

「――」

「周助の何だ」

平次の調子は、いつもになく厳きびしくなりました。飛込んで来た手懸てがりを、あわてて手繰たぐり寄せようとしたのです。

「何でもありません」

「何でもない周助を訪ねて来たというのか」

「え」

「どんな用事があつたんだ」

「なんにも用事なんかありません。この辺まで来た序ついでに寄つたんです」

平次はこの娘から、何にも引出せそうもない事に気がつきまちなまぐさした。血腥い事件に関係するにしては、娘はあまりに開けっ放しで、清らかです。

「銭形の、うまい者が飛込んで来たようだね」

三輪の万七は、いつの間にやら、後ろに立っていたのです。

「三輪の兄哥か、――銅六はどうした？」

平次も少しばかり皮肉ひにくになつて見たい心持のする日でした。

「何にも言わねえ、――石でも抱かなきゃ口を割る野郎じゃねえ」「で？」

「俺は銅六の家を見に来たのさ。ところが銅六よりも面白そうなのが見付かったじゃないか、さすがは銭形の兄哥だ、そいつを現場へつれて行って、一と眼、周助に逢わせて見るがいい」

三輪の万七は娘を家の中へ入れて、碧血あおちの海を見せ、その顔に

浮ぶ恐怖か疑惑か、ともかくも感情の動きを見ようと言うのでしよう。

「そいつは殺生だよ、三輪の」

銭形平次は驚いて止めました。証拠を掴めるかどうか判りませんが、この明けっ放しで生一本らしい娘に、残酷な死骸は見えなかったのです。

「そんな気の弱いことを言って居ちゃ埒が明かねえ、——さア、ちよいと、此方へ来るがいい。面白いものを見せてやるから」娘を小手招く三輪の万七。

「――」

娘は本能的な恐怖に思わず身を退きました。

「怖がる事はない、ちよいと覗いて見るがいい、飛んだ面白いものがあるぜ」

三輪の万七は、娘の手を取って、惨憺たる六畳を覗かせたのです。

「あッ」

娘は、一と目、悲鳴をあげて土間に崩折れました。

「お滯ちゃんじゃないか——そんなものを見ちゃならねえ」

飛込んで来たのは、二十六七の若い男、右隣りの魚屋伝吉です。

「俺が見せたんだ、文句があるなら俺に言うがいい、——なア、伝吉」

「親分さん、あんまり殺生じゃありませんか」

伝吉は三輪の万七に突っかかります。

「余計な世話だ。それとも、お前はここの娘の何かでもあるのか」

「親分さん」

「先^まずそれから聴こうじゃないか、伝吉」

三輪の万七は機会を掴^{つか}んでグイグイと突っ込むのです。

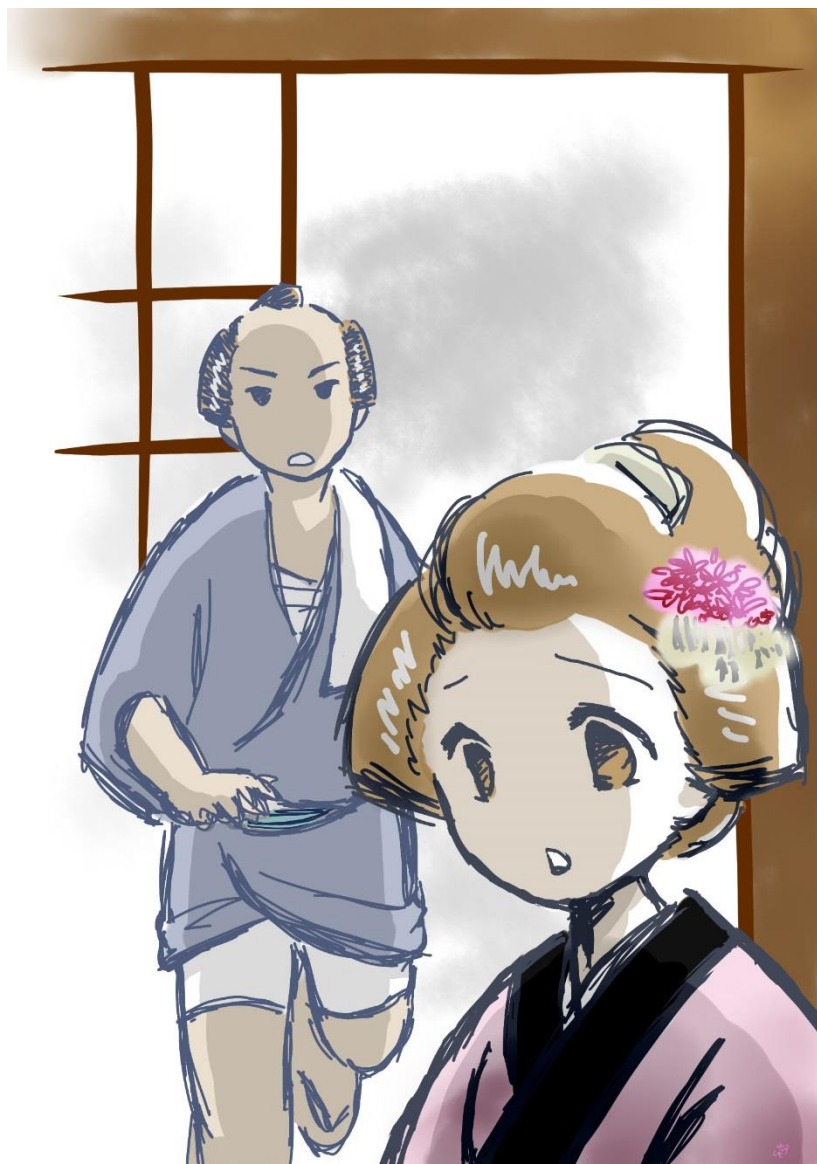
「何でもありやしません」

「何でもなさや引っ込んでいるがいい。さア、娘、——おみおとか言ったね、俺は三輪の万七だ、お前の訊^{たず}ねる周助は、昨夜^{ゆうべ}人手に掛^かってこの有様だ。下手^{げしゅにん}人はまだ解らねえ、が、殺した出刃^{でば}は、その伝吉の家から持出した品だ、——ちよいと、その血染の庖丁を取ってくれ」

三輪の万七は、血にひたったまま、畳の上に転がっている出刃庖丁を指すのでした。

「――」

正気を取戻した娘は、あわてて顔を覆^{おお}いました。首を振ると、つまみ細工^{かんざし}の簪^{かんざし}が、短冊形の小さい銀板をキラキラと光らせます。



「親分、そいつは可哀想だ。庖丁が入用なら、あつしが取って上げますよ」

伝吉は膝で畳の上を這い寄ると、血染の庖丁に手をかけるのでした。

「止さないか、伝吉」

「へエ——」

「誰がお前に取れと言った。鮪まぐろや鰹かつおを切りつけているお前に、血染の庖丁を持たせたって面白くも何ともあるものか」

「へエ——」

万七の調子はどこまで冷酷だか解りません。良い男の伝吉は、それを聞くとさすがにムツとした様子でしたが、思い直して庖丁を畳の上におきました。

銭形平次は、黙ってそれを見ていたのです。飛入りの三輪の万七の苛辣からつな調べが、平次にいろいろの事を教えてくれるのでしよう。

四

「親分、いい心持だぜ」

「何だ、八」

「三輪の万七親分大眼鏡おおめがね違いさ。銅六が帰って来たのは、伝吉の後と解ったんだ」

「すると伝吉が嘘を吐いたのか」

「それが変なんだ。伝吉は友達のところに祝儀があつて亥刻半過よつぎに帰ったって言うが、灯は亥刻よつずっと前から点いていたそうで

す。証人は並び長屋に二三人あるから、こいつは間違いつこはねえ」

「フーム」

「銅六が表の酒屋へ貧乏徳利をブラ下げて行ったのも本当だが、そいつは亥刻半過ぎだ。酒屋が言うんだから、嘘じゃねえ」

「――」

「あんな浅間あさまな三軒長屋の真ん中に住んでいる周助を殺して、両隣りに知れねえわけは無え。銅六のいない時伝吉がやったか、伝吉の留守を狙って銅六がやったか」

方々嗅ぎ廻って帰った八五郎は、威勢いせいよくまくし立てるのでした。

「右も左も留守だったら、どんな事になるんだ」

平次は横槍よこやりを入れました。

「おっと、そこに氣のつかねえあつしじゃねえ」

「近頃めつきり知恵が付いたんだね」

「赤ん坊と間違えちゃいけませんよ、――ね、親分、聞いて下さい。宵のうちは三軒とも灯がなかった、そのうち一番先に戌刻半いつつはん頃伝吉の家の灯が点いて、間もなく周助が帰って来た。周助が帰って四半刻もすると、寝てしまった様子で周助の家の灯が消え、まもなく銅六が帰って来てしばらくすると酒を買いに出かけた――斯こうですよ、親分」

「少しうるさいな、――斯うだろう、一番先に伝吉、それから周助、一番後に銅六が帰ったのだな。そのうち伝吉だけは姿を見られたわけではない、灯が点いたから、近所の者が帰ったと思った、――と斯う言うんだろう」

「その通りで」

「周助の殺されるのを、両隣りの者が知らずにいる筈はないな」と平次。

「壁は穴だらけで、坐ったまま隣の家と金槌かなづちや硫黄附木いおうつけぎの貸し借りをして居る長屋だ、周助があれだけノタ打ち廻るのを知らない筈はない、ギャツとかスウとか言えば、すぐ気が付きますよ」

「有難う、それで大分判りそうだ、——ところで、三輪の兄哥が鑑識めがね違いをしたというのは、どういうわけだ」

「銅六を帰しましたよ」

「それっきりか」

「銅六は路地の外から町内中に聞えるような声で怒鳴どなりましたよ。——自慢じゃねえが、昨夜たった一枚こっきりの拾あわせは殺したが、人なんか殺した覚えはねえ、岡っ引奴どこへ眼玉を付けてやる、周助の切支丹野郎が死んだのは仏様の罰ばちだ、ざまア見やがれ——つて」

ガラッ八の八五郎に取っては、銅六は自分の代弁者のような心持だったのでしょう。

「ところで、三軒長屋の出入りを、誰がそんなに詳しく見ていたんだ」

「向うの駄菓子屋の女房ですよ、——神田一番の金棒引で、町内のお菜かずの匂いまで嗅ぎわけて歩く女で」

「——」

「店番をしながら、夜業よなべの亭主の帰りを待って、八方へ眼を配っているんで」

「大変な女だな、——だが、その駄菓子屋の女房の眼をのがれて、

裏口から帰る術もあるだろう」

「術はあったって用いせんよ。たった一枚の袷を質に入れたことまで、ワメき散らす人間の住んでるところだもの」

「成程な」

「ところで、周助の身許を根こそぎ洗って来ましたよ」

「それは有難い、——九州生れで、十七年前に江戸へ来たこと、その頃から独り者だったこと、医者かんさいの石沢閑斎と懇意こんいだったこと、それからどんな事を聞き出した？」

「あれ、親分は、あつしの言うことを皆んな知ってるじゃありませんか。どこで立聞きしていたんで？」

「立聞きなんかするものか——ところで、外ほかに何か聞き出したのかい」

「それっきりですよ。驚いたな、どうも」

「それじゃ今日の聞込みは俺の方が勝ちだ。石沢閑斎に娘が一人ある、お漣みおと言って、十八だが、これは滅法可愛らしい娘だ」

「その通りですよ、親分」

「同国の誼よしみで、石沢閑斎と周助、身分は違ちがうが昵懇じっこんにしているから、お漣みおは時々周助のところへ遊びに行く、——そのうちに、つい、お隣の魚屋——若くて威勢がよくて、男っ振りのいい、伝吉と懇意になった」

「へエ——、そいつは知らなかった。それからどうしました、え、親分」

「今日も周助に逢うのは口実——実は伝吉の顔を見たさにフラフラとやって来たところを、三輪の兄哥に捕まって、いやもうギョウギウ言わされたよ」

「畜生ッ、何てことをしやがるんだ」

ガラッ八はプリプリ腹を立てます。万七の子分のお神樂かぐらの清吉に、さんざんイヤな事を言われた上、これは、御存じの通りのフェミニストだったのです。

「まア、怒るな八。怒るより本当の下手人を挙げて、諸人の迷惑を一日も早く取払ってやることだ」

「諸人なんかより、その十八になる滅法めっほう可愛らしい娘の迷惑を取払ってやろうじゃありませんか」

「呆あきれた野郎だ」

平次はガラッ八をつれて、お玉ガ池の医者、石沢閑斎のところを訪ねました。

五

「銭形の親分ですか、——娘からいろいろのことを承うけたまわりました。うっかり飛んだところへ行き合せて、三輪の親分とやらに、既すでに縛られそうになったところを、銭形の親分に助けて頂いたと、娘は這ほうほう々の体で帰って参りました。有難うございました。だから佐久間町の三軒長屋へ行ってはならないと、小言を申して居たところでございます」

一向流行はやりそうもない医者ですが、半分は幫間たいこらしく、よくしゃべる五十五六の坊主です。

「お前さんは周助と昵懇じっこんだったそうじゃないか」と平次。

「飛んでもない、これでも代診こそ置きませんが、門戸を張って

いる医者ですよ。鉄砲^{てつぱうざる}を担^{かつ}いで歩く屑屋と昵懇^{ねいこん}でいいものでしょうかね、親分」

「屑屋だって人間に変わりはあるめえ。大名高家じゃあるまいし、医者が友達になっても構わねえように思うがどうだろう」

「そう言えばそれに違いないようなものですが——」

「それに、お前さんと周助は、同国だつて言うじゃないか」

「同国には同国ですがね」

「やはりその切支丹^{きりしたんなかま}仲間のようなものかい」

平次はズバリと言ひ切りました。

「と、飛んでもない、私は切支丹なんかじゃございません、先祖代々の禪宗^{ぜんしゅう}で」

「仏壇があるかい」

「この通り、大したものじゃありませんが」

次の間の唐紙を開けると、ひと間一パイの大仏壇、扉をあけると、燦爛^{さんらん}たる仏具^{まぶ}が眩^{まぶ}しいばかりです。

「禅宗の仏壇にしちや大奢^{おおおご}りだ、——尤^{もっと}もあまり線香やお燈明をあげる様子もないが」

「そんな事はございません」

「第一、ひどい埃^{ほこり}じゃないか」

「何分娘と二人の無人でございます。薬箱持の男は居りますが、それは通いで、夜は帰ってしましますし、下女は一人おりますが、居睡りするより外に芸のない女で——」

石沢閑齋^{かんさい}の説明する間に、平次はざっと四方^{あたり}に眼を配りました。門戸の大きいに似ず、恐ろしく流行らない医者らしく、内輪の苦しさは、仏壇の雄大さに似ず、貧しい調度にもよく判ります。

「ゆうべは何処へも出なかったんだな」

「病人はありました、松永町の伊勢屋の隠居、——これはもう長い間の病人で大分よくなっていたんだが、近頃の暑さでぶり返しましてな」

「時刻は？」

「戌刻^{いっつ}前に行つて、亥刻^{よっ}ちよいと過ぎに帰りましたよ」

これより外に平次にも訊くことはありません。それから奥の部屋に、たった一人つくねんとしている娘のお漣^{みお}に逢つていろいろ訊いて見ましたが、父親がゆうべ何刻に出て何刻に帰ったかも知らず、けさ佐久間町へ行ったことが知れて、ひどく父親に叱られた、という以外には何にも纏^{まと}まったことは掴めません。

「お漣^{みお}さんは、いつ頃から周助を知っていたんだ」

と平次。

「ずっと、——小さい時から知っています」

「国許にいる時からだね」

「いえ、私は江戸の事しか知りません。九州で生れたということですから」

「周助は身寄^{みより}ではなかったのだね」

「え、でも、叔父さんのように思っていました」

「魚屋の伝吉は？」

「——」

お漣^{みお}は黙って真赤になつてしまいました。うな垂れると、よく鼻筋が通つて、柔^{やわ}かい頬のふくらみ、眉のあたり打霞^{うちかす}んで、不思議に可愛らしい娘です。

「これはぜひ訊いて置きたいが、——伝吉と、お前と、何か約束で

もあつたのかい」

「――」

娘は何にも言いませんが、妙に打ち湿しめった姿です。

「二人の間に何か約束をした――と思つて構わないだろうな」

「でも、父さんが許しては下さいません」

「なるほどね――」

「私は――」

あとはもう何にも言えませんでした。

「父親が承知しないのは、ワケのある事だろう」

「奉公をしろと――」

お漑は涙の隙ひまにこれだけの事を言うので精いっぱいでした。

「よしよし、もうお前を困らせない。あんまり物事はクヨクヨしないことだ。思案に余ることがあつたら、俺にそう云つて来るがいい。十手捕縄ほうを投り出して、相談に乗ってやろう」

平次はどうとうそんな立入ったことまで言う氣持になつておりました。お漑はそれほど人の心をひく娘だったのです。

石沢閑齋の門を出ると、

「イヤな坊主だね、親分」

ガラッ八は大きな声でこんな事を言います。

「その代り、いい娘を持っているじゃないか」

「ヘッ、――あつしもそれを言いたかつたんで」

「そんな事はどうでもいい、松永町の伊勢屋へ行つて、隠居の容体と、ゆうべ閑齋が行つた時の様子を訊いてくれ」

「ヘエ――」

「それからもう一つ。娘からは訊きけなかったが、あの親父が、娘

をどこへ奉公にやるつもりか、それを訊き出すんだ。こいつはむずかしいかも知れないよ」

「なアに、わけはありません」

「じゃ頼むぜ、他ほかにも気の付いたことがあつたら訊いてくれ」

「親分は？」

「俺は魚屋の伝吉と、蝮まむしの銅六にもういちど逢つて見る」

二人は其処で別れました。

六

平次は佐久間町の三軒長屋に引返しました。

「銭形の、見当は付いたかい」

三輪の万七はまだこの辺に頑張がんばつて、いやがらせな顔をひけらかして居ります。

「いや、少しも」

「銅六は一番臭いが、癩しかにさわることに一番後で帰つて来て居る。すると、一番先に帰った伝吉が怪しいと思うがどうだろう。出刃

庖丁の事も、考えようでは伝吉の下手人という証拠になるが――」

こんがらかった事件を持て余して、万七は競争相手の平次の知恵たよまで頼もつとろうとするのです。

「それも尤もつとのだが、ね、兄哥。どんな証拠があるにしても、伝吉は人を殺すような人間には見えないが、どういうものだろう」

「顔や様子じゃ判らないよ。お滯みおといい仲になつているようだから、世帯を持つ金でも欲しかったんだろう。お玉ガ池の閑斎坊主は、百も出しゃしめえ」

「だが、金は奪った様子はないぜ。それに、娘をくれないから、伝吉が憎いのは閑斎で、周助は若い二人に取っては恩人だぜ——唄の文句にもあるじゃないか、恋の取持ちや何とかよりも可愛い——とな」

平次は洒落たことを言いました。

「フーム」

「その周助を殺すわけではないじゃないか」

「出刃庖丁は伝吉のだし、流し元は血だらけだし、絆纏はプンと腥いぜ。魚の血だか、人間の血だか解ったものじゃない」

万七が頑固に主張するのも無理のないことでした。事件のあった朝、駈け付けて三軒長屋を調べると、伝吉の家の流し元から溝へかけて、鮮血を洗った水が溜って居たばかりではなく、絆纏は大抵魚の脂と血に染んで、その上へ人間の血が着いても見分けつかないほど汚れて居たのです。

そのとき万七の注意は銅六にばかり向いたので、伝吉を突っ込んで調べる気にはならなかった様子ですが、もし、銅六というものが無かったら、伝吉は免れようがなかったことでしょう。

「魚屋の流し元に血があっても、それだけでは縛るわけに行くまい、——それより大事なのは、伝吉は友達の祝言で遅くなったと言っているが、その友達はこの誰で、祝言の席に何刻まで居たか、それが解りさえすればいい。周助や銅六より先に帰ったか帰らないか、——俺はそれが知り度いよ」

銭形平次のさり気ない言葉が、ひどく万七を刺戟した様子で、「それじゃ、銭形の、俺は一と廻りして来るぜ」

コソコソと万七は姿を消しました。多分伝吉の友達の家へ行っ

て、祝言の席に列^{つらな}った人から、伝吉の帰った時刻を聞き出すつもりでしょう。

その後姿を見送った平次は、一番奥の蝮の銅六の家を覗きました。

「居るかい、銅六」

「誰だ、人を呼捨てなんかにしやがって」

ヌツと出した鼻の先へ、平次の顔が近々と笑います。

「たいそう威勢がいいんだね、銅六親分」

「ああ銭形の、からかつちやいけません。これでも神妙に控えているんですぜ」

「よしよし、お前の神妙を疑っているわけじゃない。ところで、

——本当の事を言つて貰いたいんだがな、銅六」

「へエ？」

「隠し立てをすると今度こそは周助殺しの下手人で、伝馬町に送られるよ」

「飛んでもない、親分」

「ゆうべお前は亥刻^{よっ}時分に帰って来た、——それは駄菓子屋の女房が見て居るから間違いはあるまい」

「へエ——」

銅六は気味が悪そうに金壺^{かなつばまなこ}眼を光らせました。

「日頃周助が大金を持っていることを知っていて、お前は昨夜^{ゆうべ}という昨夜、周助の家へ借りに行った筈だ、嫌だと言ったら手荒なことをするつもりで——」

「親分、そいつは」

「黙って聞かないか」

「へエ——」

「麻裏を突っかけて行って、お勝手から這い上り、出刃庖丁を捜したが見えなかった。仕方がないから拳骨で脅かすつもりで障子を開けると、周助は一と足先に斬られて血の海の中に死んでいた。おどろいて元の裏口から帰るとき、お前は履いて行った麻裏と、雪駄せったと間違えて来た筈だ、——その雪駄はこれだ」

平次は銅六が上り框かまちの下へ突っ込んでおいた白鼻緒しろはなおの雪駄を引出して見せたのです。

「えッ」

「間違った雪駄がお前の家になきゃ、この平次もお前を周助殺しの下手人と思ひ込むに違いない。何が仕合せになるか解らないな、銅六」

「親分」

「弁解したって無駄だよ、——雪駄を湯屋で間違えたなんて誤魔化かしても通用しないよ。裏革うらがわが裏口の水溜りみずたまへ踏込んだと見えて、ひどく濡れているし、周助の家のお勝手の土間にある、何か古道具の詰物に使ったオガ屑くずが附いている」

「——」

「本当の曲者はお前が入って来たのにおどろいて、一たん表口へ逃出したが、まもなくお前が帰ったので、裏口へ廻った。その時はもう雪駄はなかったもので、仕方なしに、お前の麻裏を履はいて帰った——どうだ、銅六」

平次の論告には一分の隙もありません。

「恐れ入った親分、それに寸分の違いはねえ」

銅六は額の冷汗を拭いました。

「それから景気付けに一杯呑むつもりで、表の酒屋へ行ったが開けてくれなかった。仕方がないから家へ戻った、——訴^{うった}えて出ようと思ったが、傷もつ足でそれも出来なかった。とうとう一と晩マジマジと明かしてしまつて、翌る朝見付けたような顔をして騒ぎ出したろう」

「その通りですよ、親分」

「ところで一っだけ訊きたい、——魚屋の伝吉がゆうべ歸つたのは、何刻だか知ってるだろう」

「そいつがよく解らねえよ、親分。灯はあつしが歸つて来た時は点いて居たが、人間が居るような様子はなかった」

「よしよし、それじゃ、この雪駄は借りて行くよ。——しばらく足止めだ、下手人が^{あが}挙るまで外へ出ちゃならねえよ」

「へエ——、それは構いませんが、ね、親分。何日くらいかかるでしょう」

「相手は容易ならぬ曲者だ、明日挙げられるか、明後日挙げられるか、それとも十日、一と月かかるか」

「冗談じゃありませんよ、親分。米櫃^{こめびつ}は空っぽですよ、下手人が七日も挙げがらなかった日にゃ、あつしは乾^ひ干^ほしだ」

「心配するな、その時は米代くらいはたてひいてやる。銅六の干^ひ物^{もの}なんざお上だつて有難くないよ」

「へエ——」

心細そうにする銅六を見捨てて、平次の足は一軒置いて隣りの魚屋伝吉の家へ向つて居りました。

「これは、親分」

これも足止めを喰らっている伝吉、少し迷惑そうな顔を平次の前に出します。

「飛んだ気の毒な隣となりづ附き合いだが、かかり合いだ、何事も隠さずに話してくれ」

「へエ」

そう言う伝吉は、腥なまぐさい身み扮なりにもかかわらず、本当に良い男でした。少し焦げた真珠色の皮膚ひふの色も、糸を引いた三白眼も、絵に描いた若衆に絆はんでん纏てんを着せたようで、界限の娘たちに騒がれるのも無理のないことです。

「隣りの周助とは、大層懇意こんいだったそうだな」

「へエ——、親身も及ばぬ深切にしてくれやした」

「お濡みとの仲を取持ったのも周助かい」

「取持ったというわけじゃありませんが、何としてもウンと言ってくれないお玉ガ池の父とつさん（石沢閑齋）を納得させて、きつと二人を一緒にしてやる、閑齋が何と言おうと、俺には俺の考えがあるから——とそんな事も言ってくれました」

「何か、閑齋の急所を掴つかんでるわけだね」

「いえ、そんな事もないでしょうが——」

伝吉は少しヘドモドしました。自分たちには辛つらくとも、お濡みの父親の事を、悪く思っつて貰もらいたくない様子です。

「ところで、ゆうべお前が帰ったのは、何刻どきだえ」

「亥刻半過よつはんぎでした」

「前から灯は点いていたというが、それはどう言うわけだ」

「それがあつしにも判りません」

「お前が帰って来たとき、灯が点いて居たというのか」

「へエ——」

伝吉は首を捻^{ひね}るばかりです。

「それじゃもう一つ訊くが、この雪駄は誰のだい」

平次は最後の切札を出しました。銅六の家から持って来た南部^{なんぶ}表^{おもて}革^{かわ}鼻緒^{はなご}の雪駄が一足。

「それは」

伝吉の顔色がサツと変りました。

「この雪駄がゆうべ周助の家の裏口にあつたんだ、——本当の事を言わなきゃ取返しがつかないよ」

平次の刺^さした釘が、想像以上に利いた様子です。

「あつしですよ、親分」

伝吉の応えは予想外です。

「何？」

「二三日前に、お隣の裏口へ忘れてきた雪駄ですよ」

伝吉はゴクリと固唾^{かたず}を吞みました。

「自分の履^はいて行った雪駄を忘れて来たというのか」

「へエ——」

「魚屋がなめし革の鼻緒の雪駄を履^はいて歩くのか」

「——」

「こいつは武家の履くものだよ、伝吉」

「そんなのが履いて見たかったんです、親分」

伝吉は泣出しそうでした。

「この雪駄がお前のだとすると、気の毒だがお前をここで縛らなきゃならない、それも承知か」

平次は立ち上がって、懐の十手を取り出しました。が、その時、

「親分」

飛込んで来たのは閑斎の娘のお漣みおでした。

「あ、お漣さん」

「お前、そんな事を言って縛られて行く気かえ」

いきなり伝吉に取縄とりすがった娘——お漣の純情な姿を、平次の十手も引分け兼ねました。幫間たいこ医者いさの石沢閑斎に、どうしてこんな娘が生れたことでしょう。海坊主が弁天様を生んだような造化まぐの気が紛れまぐを平次はまざまざと見せられたような気がしたのです。

「お漣さん、こいつはわけのあることだ。こんな所に居てかかり合いになると悪い、早く帰っておくれ」

伝吉はそう言いながら、証拠の雪駄をお漣の眼から隠かくそうとするのです。

「お漣さん、——お前この雪駄を知っているだろうな、——」

平次は伝吉の後ろから雪駄を取り出して、お漣の眼の前に突きつけます。

「えッ」

「伝吉は自分のだって言うが」

「伝吉さんのじゃありません。伝吉さんはそんな雪駄なんか履くものですか」

お漣が躍起となって、伝吉を庇かばうように平次の前に袖を振りましました。

「それじゃ誰のだ」

「知りません」

「本当に知らないのか」

「――」

「お前の顔には、知つてると書いてあるが――」

明けっ放しな娘の顔から、ある種の表情の動きは見ましたが、それ以上は平次も手繰れたぐそうありません。

「ともかく、伝吉は大事なかかり合いだ、何処へも行っちゃならねえよ」

「――」

何やらうなずき合う若い二人を後に、平次は引きあげました。ガラッ八の報告を聞いてから第二段の活動に移ろうと言うのでしよう。

八

「親分、判ったぜ」

「八か、――何が判ったんだ」

「自慢じゃねえが、みんな判ったつもりさ」

八五郎が帰って来たのは、その日も暮れてからでした。

「大きな事を言うぜ、どこへ行つて何を聞出したんだ」

「周助が切支丹きりしたんの南蛮なんぼんぶつ仏ぶつを持もつていいるうし、石沢閑齋いっけんと昵懇じっこんで、九州から江戸へ来た者だというから、宗門御改めの書役に願つて、二人の身許を書き留めたものはないか訊いて見たんで」

「そいつは上出来だ。で、どんな事が判ったんだ」

平次もガラッ八の気の廻るのに感心しました。

「周助は宗門御改めおあらたの台帳に乗っている転び切支丹（改宗者）でしたよ」

「フーム」

「正直屑屋くずやで通っているし、別に切支丹を弘めるわけでもないから近頃は放つてあるが、昔はなかなかうるさい男で、江戸へ出る時は何千両の金を持って来たが、宗旨の事で大方は費い果し、何はりつけばしらべん磔刑柱を背負しよいかけたか解らない」

「フーム」

「綺麗な女房と小さい娘があつた筈だが、女房は十七年前に死んで居る。娘はどうなつたか解らない」

「それから」

「周助は佐賀さがの者だつて言うから、念のために鍋島様のお留守居へ行つて訊いた、すると親分の前だが、石沢閑齋の身許まで一ぺんに解つた。——周助は城下の大町人だが、石沢閑齋はあれでも武家だ、鍋島様の家中で五十石取の石沢勘十郎というのがあの海坊主野郎の本名だ。不都合なことがあつて永いしまの暇になり、十八年前江戸へ出て、少しばかり心得があるのを幸さいわい医者になつた」

「閑齋の石沢勘十郎は女房子があつたのか」

「それが無いから不思議で」

「待て待て、すると可怪おかしなことになるよ」

「——」

「十七年前女房と娘のあつた周助は独ひとり者で、女房も子供もなかった閑齋が、今では十八になる娘がある、——その上閑齋は海坊主のような男だが、お濡みおは弁天様のように綺麗だ、——周助は屑屋こそしていたが、なかなか良い親爺振りだつた」

「――」

「二人は鍋島様の御家中と城下の商人だが、同じころ国許を退転たいてんし、十七年の後まで昵懇に付き合っている」

「八、こいつは面白くなって来たぜ」

「？」

「周助と閑齋は同国で昵懇で、同じ頃国許を退転したんだろう」

「閑齋は海坊主のような野郎だが、お漣は弁天様のように綺麗だ」とガラッ八。

「口真似くちまねをするな、――転び切支丹と言つても、周助は腹の底から転んだわけじゃない。十七年後の今でも、南蛮なんばんぶつ仏の子育観音を拜んでいる男だ、――何時どんなことで縛られて、磔刑柱はりつけばしらを背負しょわされるかも知解らない。母親に死別れて、ようやく乳を離れた、たった二つの娘までそんな目に逢わせたくはない」

「尤もだ」

「馬鹿野郎、人の話を囁はやす奴があるか」

「へエ――」

「どうだ八、お漣は周助の娘と見たが、――この鑑定めきぎは当るか」

「大当りだよ、親分」

「町人出の周助、屑屋くずやをしても百両の小判を持っている男だ。その頃はまだまだ何千両の大金を持っていたんだろう。娘の行末を案じて、一生親娘の名乗りをしない約束か何かで、金をつけて閑齋にやったに違いあるまい」

「その通りだよ、親分。自分の本当の娘でないから、閑齋の海坊主奴、お漣を大旗本の何とかの守の妾めかけに差出すことを承知したんだ」

ガラッ八は大変なことを言い出しました。

「そいつは本当か」

屹となる平次。

「お玉ガ池の桂庵が万事取持つて、支度金が三百両。越後屋へ夏冬の物まで誂あつらえたそうですぜ」

「本当の親の周助は、隣に住んでいる魚屋の伝吉の男前と氣風きつぷに惚れて、お濤を伝吉にやる氣になっている。腹の底からの切支丹の周助が、娘を旗本へ妾奉公に出すのを承知する筈はない。切支丹じゃそんな事がやかましいそうだ」

「切支丹でなくたって、阿呆陀羅經あほうだらきようだって畜生承知をするもんか。あれ程の娘を旗本なんかへ妾奉公させたら俺が勘弁しねえ」

ガラッ八はいきみ出しました。

「周助と閑齋とが揉もみ抜いたことだろう。閑齋から言えば、十七年も手塩てしおにかけて育てた娘を、担ぎ魚屋にやる氣はない、周助は旗本へ妾奉公に出す氣はない、——閑齋の海坊主奴、それが嫌なら周助に三百両とか五百両の金を出せとでも言ったんだろう」と平次。

「太え野郎だ」

「怒るな八、これは俺の拵こぎえた筋書だ。ところで周助の方は、どうしてもお濤に妾奉公をさせる氣なら、十七年前の事を娘に打ち明け、（お濤は閑齋の子ではなくて、真実俺の子に相違ない）と言うつもりだったかも知れない」

「ありそうな事だ、親分」

「そんな事を言われちゃ閑齋はたまらない。そうでなくてさえ、伝吉との間を割かれて、妾奉公をさせられる事になってから、お

滯は父親を怨み抜いている」

平次の想像は一つの無理もなく、次第次第に大きな現実の姿に築き上げられて行くのでした。

九

「ところで、松永町の隠居はどうした」

平次は不意に他の事を訊きました。

「大した病気じゃありませんよ、長い間の喘息なんだそうで」

「真夏に喘息が悪くなったのか」

「悪くなったわけじゃないが、呼びもしないのに閑齋が来て、戌刻過ぎまで無駄話をしていたそうですよ」

「松永町の伊勢屋から、佐久間町一丁目裏の三軒長屋は近いな、八」

「背中合せだぜ、親分」

「それだッ、無人の家を空けて、薬箱持ちの男も居ない夜中、わざわざ呼びもしない病人のところへ行ったのは、深い企みがあったからだ」

「あつしもそれを言いたかったんだ、親分」

「三軒長屋の裏から廻って、伝吉の家のお勝手から入りや、金棒曳の駄菓子屋の女房も気が付くわけはねえ。灯が点いたのを見て伝吉が帰ったものと思ひ込んでいる」

「すると、親分」

「その晩伝吉が友達の祝言で遅くなることを、閑齋はお滯の口からでも聞いたんだろう。周助を殺して、その疑いを伝吉へ持って

行きや、思う壺だ」

「海坊主奴、太てえことをしやがる」

「わざわざ血だらけな手を伝吉の家の流しもとで洗っているが、商売が魚屋だから折角の企らみも無駄だった。伝吉の家から出刃庖丁を持出したのまで、却って伝吉の無実の証拠になった。三輪の兄哥は銅六ばかり狙った」

「親分」

「八、来い。お玉ガ池だ」

「合点」

二人は石沢閑斎の家へ飛んで行きました。

「おや？ 誰も居そうもないぜ」

「裏へ廻って見よう」

空き家のような大きな家の裏へ廻ると、お勝手で山出しの下女が一人。クラリクラリといい心持そうに行燈を拝んで居ります。

「あ、お前様は誰だい」

「シッ、静かにしろ、これが見えないか」

平次は一番効果的な十手を見せて、この女の放図もない声を封じました。

「シエー」

「主人は居るか」

「先生は奥に居るだよ」

「よしよし、いい娘だ、静かに、俺の訊くことに返事をしろ」

「シエー」

「昨夜、主人の帰ったのは何刻だった」

「知りましねえよ、戌刻半から子刻の間だんべえ」

「それじゃ何の役にも立たない、——ところで、この雪駄を知ってるだろうな」

平次は銅六の家から持って来た革鼻緒南部表の雪駄を見せました。

「先生の大事にしてる雪駄だよ」

「本当か」

「間違いはないだ、二分もした雪駄だって自慢をしていただ」

「ところで今朝、見馴れない麻裏草履あさうらぞうりがあつた筈だが——」

「庭の方に変な焼印やきいんを捺おした麻裏があつただよ。見付けて持つて来ると、先生がいかく怒つて、そんなものを置いぢやならねえつて神田川へ持つて行つて捨てただ」

下女の話は一つ一つ証拠の裏付けをして行きます。

「八、これで沢山だろう、来いッ」

平次は八五郎を促うながして奥へ踏み込みました。

「御用ッ」

「閑斎御用だぞッ」

がしかし、主人石沢閑斎がいる筈の奥の一と間は空っぽ。

「親分」

「八、風を喰らったか」

二人はしばらく顔を見合せるばかりでした。

「これは何だ」

平次が取上げたのは、机の上に、封を切つたまま載のせた手紙が一通。

「女の筆蹟てじゃありませんか、親分」

「あッ、——こいつはお濡みの書置かき置きだ、伝吉と一緒に死ぬつもりだ

ぜ、八」

くりひろげると、哀れ深く綴った文句は、——父親の非道を責めながらも、添いとげ兼ねる伝吉と一緒に死んで行くことが、先立つ不孝の罪と言った極り文句で書いてあるのです。

「父親が周助を殺したことも、大方察して居たんだね、——雪駄の事を問い詰められて、自分のだと言った時、伝吉はもう閑斎の罪を覚ったんだろう」

「助ける工夫はないでしょうか、親分」

「それだよ、閑斎が周助を殺した事は気が付いても、周助がお滞の本当の父親だとは知るまい。早くそれを教えてやったら、考えが変ったかも知れない」

「親分」

ガラッ八はしきりに気をもみますが、平次もどうする事も出来ません。

「この手紙が来たのは何時だい」

平次は下女に訊きました。

「つい先刻だよ、お前様が来る少し前だ」

「誰が持って来たんだ」

「お嬢様が自分で持って来て、ソッとお勝手へおいて行っただ」

「閑斎はそれを読んで、あわてて飛んで出たんだろう」

「そうだよ」

「行ってみましょう、親分」

ガラッ八はもうスタートを切りそうにしています。

「どこへ行くんだ」

「サア、そいつは解らねえ」

「遺書には死に場所が書いてないぜ」
かきおき

「見当はつきませんか、親分」

「江戸っ子が心中をするんだ、二人並んでブラ下がるような色気のない事はしないだろう」

「並んでヘドを吐くのもいい図じゃないぜ」
は

「近いところは浜町河岸か両国だ。行ってみようか、八」

「合点」

二人は呆氣あつけに取られている下女を残して、月夜の街を浜町河岸に飛びました。

「居ないね、親分」

「人目に立つように身を投げる奴はないよ」

「でも、伝吉は魚屋でしょう、ちつとは水心がありやしませんか」

「魚屋は魚じゃないよ」

「そう言えばそれに違えねえが」

二人は無駄を言いながら両国の橋の袂たもとへ来ました。

夜になると、その頃の橋の上の淋しさは、いま考えるようなものではありません。

「親分、あれは？」

「シッ」

朧銀おぼろぎんのような橋の上の月夜。その上をトボトボ歩いて行く男女

二人、中ほどに差しかかると、欄干らんかんに凭もたれるように、しばらく何やら話している様子です。

その後ろから、二人の後を慕うように、もう一人の人影。

「八、お前はあの心中を止めろ、俺は他に用事がある」

「――」

二人が囁く間もありません。橋の上には凄まじい旋風せんふうのような騒動が起りました。

欄干を越えて飛込もうとする二人、それを止める人影、一団になって揉み合うその三人の上へ、平次とガラッ八がのしかかつて行つたのです。

一瞬しゅんの後、平次は怪人を縛り上げました。それが石沢閑斎であることは言う迄ありません。ガラッ八の手はむずとお濡みを押えるのを、

「何をしやがるんだ」

事情を知らぬ伝吉は猛然として突っかけて行きます。

「どっこい待つた、これにはわけがある」

平次は声を絞しぼりました。

「何を」

果し眼はたになつて勢きう伝吉。

「お濡の本当の父親は、殺された周助だ。閑斎かんさいは養い親だが、生みの親じゃない」

「――」

平次の言葉が、いろいろの事を考えさせました。周助の法外な同情も、閑斎の慾に眼のない冷酷な態度も、この言葉一つで解けてしまったのです。

「解つたか、――お濡さんには養い親だが、閑斎は悪い野郎だ、今までも周助からどれだけ絞つていたかわからない。周助は転び切支丹だが、佐賀さがの大町人で、江戸へ来る時、何千両の金を持って来た筈だ。それを、娘可愛さに、閑斎に絞り取られた。万一切支丹たんと知れて、娘まで処刑しおきになつては可哀想だと思ひ込んでいたの

だ、——閑斎はそれをつけ目に十七年の長い間周助を脅かし続けた。が、もう強請^{ゆす}ろうにも絞り尽してしまつて、周助には金が無くなつてしまつた。そこで閑斎はお漣を大旗本へ妾奉公に出そうとした。切支丹の周助はそれを承知する筈はない、——父娘揃^{おやこそろ}つてお処刑になる覚悟で、妾奉公にやるなら、娘に本当の事を打明け、親娘名乗をして引取ると言い出した」

「――」

平次の論告は半分想像の上に築き上げられたものですが、拔差しならない条理が、整然として組み上げられて行くのです。

「閑斎は本当の悪人だ。お漣を餌^{えさ}にしてこの上の大金儲けをするには、周助と伝吉が邪魔でしようがない。いろいろ考えた末、伝吉の家に忍び込んで灯^{あか}りまでつけた上、周助を殺して疑いを伝吉に振り向けるように精いっぱい証拠を残すつもりだったが、銅六に脅かされて雪駄を置いて逃げ出し、伝吉の家のお勝手へ戻つて、流しもとで血の付いた手を洗つて引揚げた。こんな悪知恵の廻る野郎はない」

「――」

「この悪党に義理を立てて死ぬことがあるものか、本当の親の周助を殺した敵だ。その上放つておいたら、お漣は骨までしゃぶられる」

「違う、そいつは大違いだ、——俺は、俺は周助を殺した、が、お漣が可愛いから殺したんだ。お漣を俺の手から奪^とられたくなかつたんだ、——お漣に栄華をさせたかつたんだ」

石沢閑斎は縛られた身をもがきながら、必死と叫ぶのです。蒼白い夏の月が、真上から照らして、しばらく往来^{ゆきぎ}の絶えた両国橋

の上は、灰を撒いたようにほの白く見えます。

「妾奉公をさせるのがお滯のためだというのか」

平次は突っぱねました。

「担ぎ魚屋の伝吉の女房になるより、七千八百石の旗本の寵妾になつた方が——」

「馬鹿ッ」

ガラッ八は縄尻をとって二つ三つ小突きました。腹が立って腹が立ってたまらない様子です。

「伝吉とお滯は佐久間町の三軒長屋へ帰るがよい。お玉ガ池の閑斎の家は、いずれお上で没収するだろう、——周助の残した金が百両、町役人に預けてある。あれは誰が何と言つてもお滯のものだ。二人はそれで表通りへ店でも持つがいい、——祝言には俺と八五郎も呼んでくれ、——何？ 仲人を頼みたいと言うのか、あ、いいとも」

平次はそう言いながら、閑斎を引立てて神田の方に向いました。その後姿を見送る伝吉とお滯、月の光の中にしょんぼりと立って、手を合せて拝んで居ります。養い親の『死の旅』を弔うのか、銭形平次へのお礼心か、それは判りません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五月初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>